

照顧すべき循環の里山文化

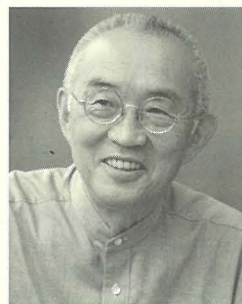
東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男

世界有数の森林王国・日本

日本の国土面積における森林面積の比率は六八パーセントであるが、これは世界を見渡すと異常な数字である。日本以上の数字はフィンランドの七四パーセントのみであり、一般に森林の豊富な地域と想像されるマレーシアは六四パーセント、ブラジルは五七パーセント、ベネズエラ

は五四パーセント、インドネシアは四九パーセント、そしてアメリカは三三パーセントであり、イギリスなどは一二パーセントでしかない。

しかも人口密度を考慮すると、日本の数字が突出していることが理解できる。フィンランドは日本の九割の国土に約五三〇万人が生活しているだけであるし、ブラジルは人口こそ日本の一・五倍であるが、国土面



積は約二二倍である。

さらに日本は世界三位の経済大国でありながら、潤沢な森林を維持してきたことでも異例である。国土の大半が急峻な山岳地帯で開発が困難

という背景もあるが、さらに重要な文化の背景がある。

森林を維持した奥山と里山

昨年、名古屋市中で開催された生物多様性条約第一〇回締約国会議で、日本の里山が注目された。現在では海外でも「SATOYAMA」として通用するほどである。これが重要な概念であることは間違いないが、奥山という言葉と一体としたとき、はるかに重要になる。神様の領域として、人間の日常の入山を規制しているのが奥山、里人が柴刈りや山菜採取に利用できるのが里山であり、その境界には神社が造営されているのが通例である。

日頃、里人は山麓の神社で奥山の神様に参拝し、一年の限定された時期だけに儀礼の装束により入山して山頂の奥社の手入れをして感謝の気持ちを伝達してきたのである。山登りは運動や娯楽ではなく宗教儀式であった。この文化により日本の森林の大半が維持されてきたのであるが、そのような文化のないイギリス移民は、全島が森林であったニュー

ジーランドを一五〇年という短期で森林面積比率三一パーセントにまで低下させた。

さらに最近になり提唱されているのが、集落の内部を流下する里川、その里川の真水が流入する里海という概念である。里川は魚釣りや炊事に利用され、里海は漁業や海藻採取の場所であり、それぞれを連絡しているのが真水である。奥山の源流から里山の河川である里川を經由し、里海に流入した真水が蒸発して雨水として奥山に還流するという循環が、森林だけではなく、日本の自然全体を維持してきたのである。

世界に評価された里山文化

ところが日本でも世界でも、文明といわれる技術が、この循環を遮断してきた。その代表がダムである。世界最大の河川ナイルは何千年間も河口のデルタ地帯を世界屈指の穀倉地帯として維持してきた。ところが四〇年前に、大河を遮断するアスワンハイダムが建設されたことにより、大河が運搬していた豊富な養分は河口まで到達せず、地下から浸出して

くる塩分を洗浄する洪水もなく、その結果、農地の生産能力は急速に低下しはじめた。

このような時期に、日本に素晴らしい世界遺産が登場した。それは文化遺産でも自然遺産でも記憶遺産でもなく、世界農業遺産である。本年六月に北京で開催された国際連食糧農業機関の会議で、佐渡と能登半島が認定されたのである。佐渡は一旦絶滅させたトキを繁殖させるために、農薬の使用を制限した農業を推進していることが、能登半島は里山、里川、里海の連携を維持していることが評価されたことによる。

これまで世界農業遺産は世界で八例しか登録されていないうえ、先進諸国での認定は最初という偉業であった。しかし残念なことに、世界文化遺産や世界自然遺産には大騒ぎするものの、世界農業遺産の意味を理解する能力のない日本のマスメディアはほとんど報道せず、結果として国民にも周知されなかった。自然と共存しながら経済を維持してきた日本の足元にある文化を、我々は自信を持って評価する必要がある。